

良寛さん

こんにちは、斎藤友蔵と申します。

昨日、良寛さんの話をしましたので、本日は良寛さんのお話させていただきます。

仏教を知らない人にも良寛さんの名前は聞いたことがあるかと思いますが、大愚良寛（1758-1831）は、「遊び」の天才として連想されることが多いようです。

『観音経』のなかで、観音菩薩が私たちの娑婆（しゃば）世界に遊ぶ、そんな記述があります。

悟りを開いた如来や菩薩からすれば、この世で暮らすのは遊ぶような心持ちだと言うのでしょう。

その天才が良寛さと言われているのですが、

ところで、仏道を歩む人たちのことを菩薩と言いますから、仏道を歩むとすればあなたも菩薩と言えます。そう言われると、なんだか嬉しくないですか。

良寛は江戸時代後期の曹洞宗の僧侶です。

歌人、漢詩人、書家としても有名です。

越後（新潟県）出雲崎の名主（なぬし）の長男でしたが、良寛はみずから出家、近くの曹洞宗の寺院に入り 22 才のとき圓通寺に移本格的な修行、33 才のときに一人前の禅僧となります。

重要なポストを蹴り、国上山（くがみやま）の五合庵といって風が吹き抜けるちっちゃな小屋で独り清貧の生活をします。

良寛さんは子供たちとよく遊びました。手毬をついたり、かくれんぼう、おはじき。

ある日のかくれんぼう、日が暮れて子どもらは良寛を見つけないまま家に帰ってしまった。翌朝、ある農夫が田んぼに来て良寛を発見。驚いて声をかけると「静かに！そんな大声を出せば子どもらに見つかってしまう」と良寛。そんな逸話が残っています（笑）。

このような話が童話などとして紹介され、良寛の親しみ深い印象が現在にまで伝わって

ます。

『この宮の森の木下（こした）に子供らと 手毬つきつつこの日くらし』

『子どもらと手まりつきつつ此（こ）の里に 遊ぶ春日（はるひ）はくれずともよし』

子供の純真な心に仏を見る、そんな心境の良寛だったのでしょう。

この時代の良寛が住んだ地域の貧しさは悲惨でした。良寛と遊んでた子どもたちが一人、また一人と口減らしのために商家やお女郎屋に売られていく…、これが庶民の現実でした。しかしその悲惨な現実を、良寛は救ってやることはできません。

良寛にできること、それはやがては売られて村を去っていく子供たちと今、一緒に遊んでやることだけです。その遊びを通じて良寛は子供や村人たちに言って聞かせた、願ったのでしよう。

いいかい、この世は遊びなんだよ、人生は芝居。

この世の舞台には殿様もいれば悪代官もいる一方で貧しい庶民がいて、我が子を奉公に出さざるをえなくて泣く泣く売られている子どもらもいる。それがこの世だ。

でもこの世のお芝居が終われば、みんな仏のいる浄土に帰るんだ。

仏が迎えてくださる。つらかったねとねぎらってくれる。

だからしばらくのあいだ、あなたはこの世でしっかりと芝居をしておくれ

これが良寛の「遊び」であったと、そのように思います。

仏道を歩むとすればあなたも菩薩と言えます。

菩薩のように、良寛さんのおうに、欲望を見つめ、欲望を制限し、欲望を浄化して、他のために欲望を活かすことを考えていきたいですね。